# 辺野古土砂北九州

発行…2023 年 4 月号・№40

３月 21 日、来年度から地対艦ミサイル配備が通告されている「陸上自衛隊勝連分屯地」の前で、「ミサイル配備反対現地市民説明会」（主催/ミサイル配備から命を守るうるま市民の会）が開かれた。一人でも多くの人に参加してもらうため、あえて「抗議集会」ではなく、「市民説明会」としたという。その効果もあったのか、不便な山中の集会だったが、１１０名もの人たちが参加した。

この勝連分屯地には、南西諸島の地対艦ミサイル部隊を統括する「第７地対艦ミサイル連隊（仮称）」が創設される計画だという。　「チョイさんの沖縄日記より抜粋転載・写真も」

## 今号は字が多いですが、引き込まれる興味深い内容となっています

≪目次≫

【自治体】自衛官募集に 55％の地方自治体が情報提供・・・・・・・・・・・・・・・ ２ページ
【マガジン９から】敗北を撮るという事（三上智恵）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３ページ
【連続エッセイ】林道でイチゴ狩り（浦島悦子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ８ページ
【連続学習会・安保条約】2・3 回目報告（天久泰）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ９ページ
【日程など】会費の納入をお願いします（～21 年度）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12ページ

発行 「辺野古土砂ストップ北九州」

# 自衛官募集に地方自治体が情報提供
# 21 年度は 55％の自治体が

**■年々増えていく情報提供**

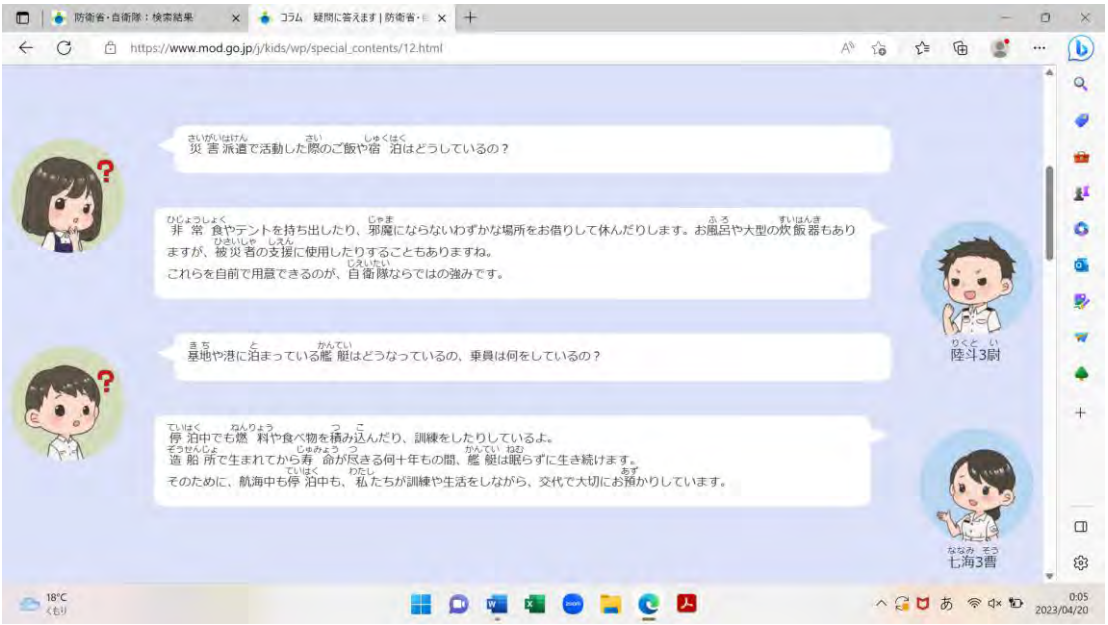
自衛隊の募集をめぐり、18 歳や 22 歳などの若者の住民基本台帳情報を、自衛隊に提供した市区町村は、2017 年度の 36％(632 自治体)から毎年増え続け、2021 年度の集計では、全国 1741 自治体のうち、約 55％にあたる 962 自治体が、情報提供をしていました。

**■宛名シールで提供する北九州市**

北九州市では 2021 年度まで、自衛隊に対し、住民基本台帳を閲覧させる対応でしたが、2022 年度からは、18 歳になる男子の住所や氏名などを、わざわざ宛名シールにし、自衛隊に提供しています。今年度は 4,457 人の情報を提供しました。

**■各地で抗議の動き**

このような中、各地で「本人の同意なしに、個人情報を提供するのは個人情報保護条例に違反し、プライバシーの侵害」「若者を戦場に送ることに自治体が協力すべきではない」「自衛隊員募集に関するこれまでの対応を住民に周知し、個人情報の無断提供を謝罪すること」など、自衛官募集のための地方自治体の名簿提供に、住民の不安や懸念、批判が広がっています。




「防衛省・自衛隊」の HP には「キッズ」のページもある。

2023 年 3 月 22 日掲載「マガジン 9:https://maga9.jp/」から転載

# 敗北を撮るということ

## 石垣島に陸自ミサイル基地完成（三上智恵）

「これで防衛の空白が解消され抑止力が高まる」
陸上自衛隊トップの吉田圭秀陸上幕僚長は記者団に胸を張った。

3 月 16 日、沖縄・石垣島に陸上自衛隊石垣駐屯地が開設した日。全国ニュースでは「南西シフトの空白解消」という防衛省が使う言葉を各社がなぞって記事を書いた。「南西シフト」の意味も「空白解消」の欺瞞も理解していない記者たちから国民へ、生ぬるくて正体不明の安心感のようなものが手渡された。こうして何かぼんやりと、安全に近づいたようなニュースとして受け取った人々は、全く違う角度から映した今回の私たちの映像を見てなんというだろうか。

今日から始動する石垣島の自衛隊基地の前で、最後まで「歓迎していませんよ」と意思表示をする人たちの姿を記録するために、私は石垣島に入り、窓のないホテルの部屋で鬱々とした朝を迎えていた。早朝の NHK ニュースでは男性解説者がこう説明していた。

・これで国防上の空白が埋まった
・ただ戦争中マラリアで苦しんだ住民には、歴史的に複雑な感情がある
・島が攻撃対象になる不安もある
・政府には丁寧な説明が求められる

どの項目も零点だ。島の運命が決定的に変わってしまった今日という日の朝に、こんなことしか言えないのか。同じテレビ報道に携わってきた人間としても憤懣やるかたない。

南西諸島の島々は長い間、「国防上の空白」などと位置付けられてこなかった。誰でもウェルカムな南の島々、日本中から世界中から愛される海と空が美しい島。それをむさぼり楽しんできた側の人間が、一方で「無防備な島」「ちゃんとしてくれないと私たちにも被害が及ぶ」と評するのは、あまりにご都合主義ではないのか。裸で泳ぎ、トライアスロンで島を一周して満喫し、帰りに「でもミサイルの一つは置いておいた方がいいよ」と言い残して帰る。そんな国民から「国防上の空白地帯」と名指しされるのは、まさに砂を噛む思いがする。

なによりも、島々に自衛隊施設を増やしていくこの 8 年に繰り返し使われた「政府は丁寧な説明が求められています」という謎の締めコメント。聞くだけでうんざりする。

人の住む島を要塞にしていくこと、弾薬を積みあげていく国防政策そのものの是非には絶対に踏み込まず、「説明不足」だけを問題にするすり替えコメントだ。つまりそれは、私たち沖縄に住んでいる側が怖がったり怒ったりしすぎていて、取り乱しすぎてうまく呑み込めていないだけで、丁寧に説明すれば落ち着くだろうという前提で組み立てられている文章だ。それは、「丁寧に説明すれば解決する、沖縄県民が理解できていないだけ」と言っているに等しく、全く人を馬鹿にしている。このキャスターは非常に傲慢に見えていることに気づいた方がいい。

●

島の人たちが感じている恐怖、軍事戦略について学んで持っている情報は、少なくともこんな政府垂れ流しの原稿を書く記者たちよりもずっと的確で精度が高い。「南西諸島防衛」という文脈の中で島嶼県である私たちが飲まされてきた煮え湯について、歴史的な理解があれば到底言えないコメントだと思う。不勉強で鈍感なのか？　それとも確信犯なのか？

●

「沖縄県民の理解が悪いだけで、そのあたりには兵隊や武器を置いた方がいいという考えは無理筋ではない。私たちは加害者ではない。ヒステリックになるのはわかるが落ち着いて」という沖縄を愚弄する政府の立場を共有し、共犯者となって、政府に必要なのは「丁寧な説明」だけで計画の見直しではないと認めるかのようなニュースの作り方は、罪深いのではないか。私は今から、新しい自衛隊駐屯地を見ると敗北感や怒りでやるせなくなるのに歯を食いしばって抵抗の意思を示すために集まる島の住民たちを撮影しに行くわけだが、こんな風に丸め込むキャッチャーが報道部で待つ放送局の記者じゃなくて本当に良かった、とリモコンのスイッチを強く押して現場に向かった。

●

市街地を抜けて北に向かうと、雄々しい於茂登（おもと）山系のふもとに、緑を削り込んで横一文字に広がる石垣駐屯地が見えてくる。石垣島らしい景観が台無しになった。西側には、まだたくさんのクレーン車や工事車両が作業中だ。未完成のままの「編成完了」だからなのか、宮古島では開設の日に編成完了式をメディアに公開したが、石垣はこの日報道陣を中に入れなかった。だから今日から開設というのに、駐屯地正門前は比較的静かで、抗議の意思を示すために集まった人の数も 50 人に満たない。自衛隊誘致を巡る住民投票を求める署名が 1 万 4 千筆余り集まった石垣島である。反対している人々は、本来かなりいるはずだ。

●

さらに去年出された安保 3 文書では、宮古島や石垣島に配備される 12 式地対艦ミサイルの飛距離を伸ばすことが明記された。つまり敵基地攻撃能力を持つミサイルを島に受け入れる格好になることについて、誘致派の市議会議員からも一斉に反発の声も上がっている。それなのに、自衛隊スタートというこの日の朝に、なぜこんなに人が少ないのだろうか。

映画『標的の島　風かたか』で石垣編の主人公の一人でもある、於茂登地区で農業を営む嶺井善さん（58）。彼とは8年前からのお付き合いだが、自衛隊始動の日が近くなるにつれて電話の声は暗くなる一方だった。

「いろんな取材が集中してくるわけ。僕はもう区長でもないのにさ。みんなが断るからこっちに来ているだけなんだけど、次から次から、“どんなお気持ちですか”って。どんな気持ちって言葉にならないって言ってるのにさ、こればっかり聞くさ」

駐屯地の地元の集落の中では、今さらプラカードを持って突っ立っても何になる？という無力感が強く、駐屯地開設にあたって抗議行動の足並みもそろわない。かといって何もしなければ、もうあきらめて容認したのかと解釈されても困る。嶺井さんは頭を抱えていた。怒りの矛先を見つけきれず、その一部はメディアに向けられる。

「とっかえひっかえ記者が来て、初めましてって。名刺を渡すわけさ。8年前からこれだけ来てくれたらね、状況はもっと変えられたんじゃないのって。出来上がってから、どうですかって来るんじゃなくてさ」

その言葉は私の胸も突き刺した。私たちは8年前の、石垣にミサイル基地が来ると発表された当初からずっと取材してるのだから、その列には入っていないと思いたいが、もっと報道でどうにかできたのではないか、という点では力不足を突き付けられる。そして「負けちゃいましたけどどうですか？」という場面を撮りに来ているハエのようなメディアの一員、と言われても仕方がない。敗北を撮影しに来たのかと煙たがられても、仕方ないのだ。

嶺井さんの辛さはわかる。地域から、よしっ！　行ってこい！　と送り出されるのでもなく、いやな質問をされることを覚悟しながら、最も見たくなかった自衛隊基地のゲートに立つなんて、嶺井さんにとって何一ついいことなどない。また矢面に立つだけ。また分断を目にするだけ。誰からもありがとうとも言われないこの役割は、なんなの？と。

今回の映像にもある、嶺井さんがゲートの前でとつとつと話す言葉を、私は胸がえぐられる思いで聞く。敗北感にまみれても、損な役回りだと思っても、逃げずに現場に来てマイクを握ってくれたことに心から敬意を表する。しかしどんなに敬意を持っても、一緒に胸を痛めても、その動画をどこかの放送局が伝えきれていないぶん、大事な島に住む人たちの声として世に出そうと今後努力をするとしても、私たちが嶺井さんたちを楽にしてあげることはもうできないのだ。

8年前に取材を始めたときには、カメラで追いかけまわして申し訳ないと思いつつも、これで、先祖が文字通り石にかじりついて開拓した土地をまた基地によって追い出されるという理不尽を止めるために機能したいという希望があった。全国の人に知ってもらえば。反対の声が多数になれば。住民投票が実現すれば止められるかもしれない。私た

ちなりに必死で取材力とカメラで「要塞の島」に向かう流れを変えようともがいてきたのだ。でも、もうそれは難しくなってしまったのに、何を撮るのか。もうしゃべる言葉はないという人たちにマイクを向ける暴力をなぜ続けようとしているのか。

2013 年の『標的の島』に始まって 5 年間に 4 本のドキュメンタリーを世に出してきたが、2018 年からの 5 年間、私が撮影記録をまとめ切れていない一つの大きな理由はその辺にある。負けていく沖縄を記録する意味。写される人にとっても辛く、カメラを回す方も辛く、見せられる方も辛い映画って何だろう？　ウィンウィンという言葉があるがルーズルーズ、三方一両損、なんと言ったらいいのかわからないが、そんな映画に 1500 円以上出してまで見ようという人がこの世にいるのか？　答えが出ないので作品に出来ないでいたというのが正しいかもしれない。それでも貯金を切り崩し、自分の時間を無限に削ってできる範囲で、撮影は手を抜いてこなかったつもりだ。しかし手元に溜まっていく危機感と敗北に満ちた映像たちを、このマガジン 9 にぶつける以外に、さして何もしてこなかったこの 5 年間だった。

ところが 2 月のことである。長野県で、沖縄とつながりながら平和を模索してきたある団体が、このマガジン 9 の映像を見る会を企画してくれた。暗に「三上さんが次の映画を作ってくれないから」という意味なのかなと苦笑しつつ、コメンテーター的に参加したのだが、私自身も現場で撮影して編集して百も承知の映像のはずなのに、5、6 本まとめて見たら内臓がギューッとなるような苦しさを感じてしまった。そして予想もしていなかったことに、鑑賞後に意見を言う人たちが、涙ぐみ、言葉に詰まり、あるいは嗚咽するほどの悲しみを現したのだった。

大の大人が、4 人も泣くんだ。こんなことは初めてだった。私の手元に溜まっている映像は、みんなが「なぜこんなことになってるんだ」と泣いちゃう映像なんだと、あらためて知った瞬間だった。それで私は、たとえ敗北しかない映画になったとしても、今年は一本映画を作るということを決心するとともに、このマガジン 9 に発表してきた過去の映像を中心に新作映画のスピンオフ（番外編）という形で 45 分の動画を制作した。それを、「見る会」をやりたいという希望者を募って無償で貸与する企画を始めた。

これから発表する新作映画の形もないうちに「スピンオフ」はおかしいとか、公開前の映画の素材を無償で世に出すのはどうか、など内外から疑問の声もあったが、今沖縄で起きていることが世の中にあまりにも伝わっていないこと、それが即ち日本の危機だということの正しい理解が圧倒的に足りないことを解消するためには、この映像は役に立つはずだという認識に狂いはないと思う。であれば、私は映画監督として称賛されるために撮影をしてきたのではなくて次の戦争を止めたいという思いだけで続けてきた仕事なのだから、これから映画に含む素材も、こぼれてしまうかもしれない素材も含め、今見ておいてほしい映像を先に世に出すことに何も抵抗はなかった。

ただ、映画作品ではなくバラバラの出来事の羅列動画として届けることにこだわった。つまりナレーションや音楽や起承転結はつけない、いわば野菜の乱切りの提供であって、主催者は仲間5人で見るにしても、自分で皿を用意し塩コショウをかけるなりして、参加者がちゃんと飲み込めるよう、正しく危機感を感じて帰れるようにフォローをする必要が生じるようにした。そこがこの企画の肝なのである。

私からこの映像を預かる人は、お金をとっていないので私にとっては「観客」ではない。受け身ではなく、一足早く映像を受け取って、一緒に戦争を止めたいと能動的に走ってくれる人という位置づけである。走りながら映画の完成を待っていてくれる伴走者になってほしいのである。この映像が敗北を映し、頑張れなくなった人を映していたとしても、それを受け取った人がまだ頑張れる人たちであれば、映像に記録した意味はあったのである。

この沖縄の記録映像を見ることをきっかけにして、頑張れなくなっている人の分まで頑張ろうという人が、この国の各地にウゴウゴと春のつくしのように顔を出してきてくれたら。それぞれが戦争を止めるブレーキになるんだと意識して仲間を増やしていってくれたら。絶望の映像が希望を生む瞬間に立ち会えるかもしれない。

そんな祈りに近い期待を込めて45分の映像をリリースし始めた。DVD返却時の送料以外に皆さんにはリスクはない。上映会をするつもりで申し込んでDVDを受取ってみたけど、友達がいないことに気づいてそっと返す、でも構わない。伝える側になって平和の核分裂を起こそうと思って動いて悩んだことが最も大事であって、上映会が成功しなくても、大きな意味があると思う。ぜひ、申し込んでほしい。

※辺野古土砂北九州では、夏～秋頃、≪三上智恵講演会≫と新作映画の≪スピンオフ上映会≫を計画しています。

あなたも、土砂全協の総会に参加しませんか

☀

**今年は沖縄のたたかいの現場を、**
**自分の目で見て、肌身で感じる総会です**

辺野古ゲート前・うるま市のミサイル基地建設現場
南部の土砂搬出予定地…なども回ります。

**詳細は、同封の申し込み用紙をご覧ください。**

浦島悦子の連続エッセイ　≪南の島から≫　№40

# 林道でイチゴ狩り

ヘリ基地いらない二見以北十区の会共同代表／フリーライター

5年ほど前「変形性股関節症」と診断されてから、それまでの20数年間、時々やっていた、やんばるの山案内ガイドも含め、大好きな山歩きができなくなった。それは淋しいが、幸い、私の住む名護市東海岸は前面の海と背後の山に囲まれ、（大浦湾にひしめく基地建設の作業船を除けば）まだまだ自然が残り、車を10分も走らせれば、海にも山にもアクセスできる。それが過疎化の進行のゆえだとしても、この贅沢は何物にも代えがたい。

私の居住地から名護の街に出るには、山を越えて島を横断しなければならない。さまざまなイベントや会議、買い物等のため頻繁に通る横断道(県道)の途中に、名護岳林道の入口がある。街からの帰途、遅くない時間であれば、入口近くの停車帯に車を停め、運動と森林浴を兼ねて小一時間、足の調子次第ではさらにもう少し、林道を歩くのが私の楽しみとなった。医者からは、平坦な道はよいが凸凹のある山道はよくないと言われているので、林道からかなり険しい山道を通って頂上に登るのは諦めた。

季節ごとに替わる、さまざまな草木の花や実を愛でながら歩く。先月は、林道にエゴノキの白い花が敷きつめられていた。高木・低木の花たちに「今年も咲いてくれてありがとう」と声をかける。とりわけ、ガチマヤー(食いしん坊)の私は、食べられる実を見つけるのが楽しみだ。最近のお目当ては、林道に自生する野生のイチゴ。イチゴは太陽の光を好むので深い森には成育せず、陽の当たる林道付近に多い。

年明け頃から、一重のバラの花に似た大きめの花を咲かせ、ルビーのようにつややかな赤い実を付けるリュウキュウバライチゴ。その次に実るのが、光沢のある黄色い粒々のリュウキュウイチゴ。これらの山の幸は、名護岳に生息する野生の生き物たち（鳥たちやリュウキュウイノシシ）の好物でもあるから、そのお裾分けを頂くわけだが、先日は、たわわに実ったリュウキュウイチゴを独り占めできた。持ち帰り、ヨーグルトを掛けて食べると、至福の味がした。

リュウキュウイチゴの次にはホウロクイチゴが実を付ける。場所を確認し、次に来る時までに実っているかな？？と胸算用しながら林道を後にした。

林道を歩く度、自然はこんなにも美しく、私たちに多くの恵みを与えてくれるのに、それを破壊する人間の「罰当たり」を思わずにはいられない。

（うらしまえつこ）

日米安保条約連続学習会…第２･３回

テキスト…「日米安保体制史」(吉次公介・岩波新書)

# 沖縄に1000発を超える核兵器が置かれた時期も

※学習した内容は、以下の通りです。小見出しは省略していますが、編集者の方でキーワードとなる文言･事項を太字にしています。

講師・まとめ
天久泰(当会顧問・弁護士)

前回は、米国が日本以外の同盟国には求めていない**「全土基地方式」(日本全土を潜在的な基地とみなす施策)を日本が承諾して、日米行政協定が締結された**ことが紹介されたほか、安保体制の構造的特質である、①日本は米軍に基地を提供するが米軍に日本防衛義務はない、米国は日本を守るが日本は米国の領土を守らないという**「非対称性」**、②独立国にふさわしくない瑕疵を持つという意味の**「不平等性」**、③密約で処理をするような**「不透明性」**について学びました。

## 1 安保体制の危険性

⑴ 安保構造の**もう一つの構造的特質は**、在日米軍による事件・事故などで国民の生命や財産が脅かされ、**基本的人権が侵害される「危険性」**である。

顕在化した米軍基地問題は、**講和の代償である安保体制の「危険性」と「不平等性」**を国民に実感させ、ナショナリズムを刺激し、**鳩山や岸が安保改定を目指す要因となった。**

⑵ 独立後の**反基地運動の多くは**、基地の新規接収や拡張による農地・山林・漁場の収奪で、農民や漁民の**生活や生産基盤が損なわれることへの抵抗であった。**

反基地運動が全国に広がる嚆矢となったのは、５２年秋から始まった**石川県の内灘演習場の接収反対運動**、すなわち内灘闘争であった。激しい闘争の結果演習場は５７年に返還された。

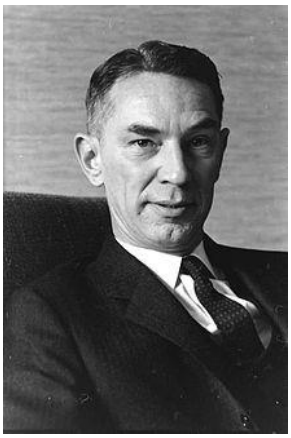
立川で５５年に始まった**砂川闘争は**反対派住民と警察が衝突し、流血の騒ぎとなり、反対派が基地内に侵入したとされる裁判では全員を無罪とし、**米軍の駐留を違憲とする判決が出された(59年･伊達判決)**。５７年には米兵が主婦を射殺するジラード事件が発生した。

**日本政府は57年5月に在日米地上部隊(陸軍、海兵隊)の日本本土からの撤退を米国に求め、海兵隊の一部は沖縄へ移住した。これにより在沖米軍は大幅に増員**され、基地拡張のため**民有地の強制接収**が進められ、５９年から６１年にかけて**1000発を超える核**

兵器が置かれた。沖縄住民の負担が重くなる中で、５９年６月に宮森小学校に米軍機が墜落する事件が発生した。

⑶　安保条約調印の５２年の時点で、行政協定の刑事裁判権に関する規定は著しく日本側にとって不利であったため、５３年９月に NATO 軍地位協定並みに公務外の米兵犯罪については日本側に一次裁判権を行使できるよう変更されたが、日米両政府は重要な案件以外、日本が裁判権を放棄する密約を交わした。実際に日本はその後の５年間に発生した事件の97%の一次裁判権を放棄した。

## ２「イコール・パートナーシップ」の形成


ライシャワー駐日大使

⑴　６０年７月に発足した池田政権は、安保闘争で傷ついた日米関係の修復を最優先の外交課題と位置づけ、中立主義を排し、「自由主義陣営の一員」として安保体制を堅持する姿勢を鮮明にした。他方で、日本国民が日米関係を「不平等」と感じていることを問題視したライシャワー駐日大使は、日米の「完全な平等」が不可欠だとして、「イコール・パートナーシップ」を対日政策の柱とした。

６２年１０月、キューバ・ミサイル危機が発生し、池田は核戦争の危機に直面してもなお対米協調を貫くのかという厳しい問いを突きつけられ、結果として米国支持を決断した。

⑵　６３年１月、米国は原子力潜水艦の寄港を認めるよう日本に求めた。池田は潜水艦発射弾道ミサイルを搭載できる原潜の寄港は拒否するが、それ以外の原潜寄港を容認する発言をした。池田が安保改定時の密約に反する発言をしたと感じた米側は、６３年４月に大平外相に対し、「持ち込み」が「日本の領土内に核を持ち込み、装備を備え付けること」を意味している旨を強調し、密約を再確認した。

国内の反対を押し切って、池田は６４年８月に米原潜の寄港を認めた。日本にとって、それは自衛隊による対米貢献ができないことの埋め合わせであった。

## ３ ベトナム戦争と安保体制

⑴　６４年１１月に始まった佐藤栄作政権の最大の外交課題は沖縄返還と、70年安保であった。６４年１０月、中国が核実験に成功した。中国の核を非常に強く警戒していた佐藤に対し、ジョンソン米大統領は、「日本が我々の核抑止力を必要とするなら、米国は義務を守り、その防衛力を提供する」と述べ、日本が米国の「核の傘」に依存することが明確化した。

米国の「核の傘」を確実なものとした佐藤は、６７年１２月の衆議院予算委員会で、「核は保有しない、核は製造もしない、核を持ち込まない」と述べ、「非核三原則」を明らか

にした。その後日本は、７６年に核兵器不拡散条約を批准した。

⑵　佐藤は、６４年８月に勃発したベトナム戦争について米国を支持し、経済発展が共産主義の進出を食い止めるとの考えのもと、対米協力の一環として東南アジア諸国を積極的に支援した。他方で、多くの日本国民が米国に正義はないと考え、世界的に広がったベトナム反戦の動きが日本にも波及した。

⑶　在沖米軍基地はベトナム戦争で極めて重要な役割を果たした。米軍統治下の沖縄には安保条約や事前協議制度が適用されず米軍は基地を自由に使用できたからである。６５年３月に沖縄に駐留する第三海兵師団がダナンに上陸し、地上戦が本格化した。B52戦略爆撃機が嘉手納基地から直接ベトナムに出撃した。６８年２月以降、B52 は嘉手納に常駐するようになり、毎月約350回も出撃した。

## ４　沖縄返還と70年安保

⑴　復帰感情が高まる沖縄に対し、佐藤も復帰を望み、対米交渉を重ねた。反米感情の高まりと７０年安保への影響を懸念して、米側も沖縄返還の検討を始めた。もっとも、ジョンソン大統領は沖縄返還に応じる考えを示す一方で、防衛力増強や国際的役割の拡大を佐藤に求めた。

佐藤栄作総理

⑵　６９年１月に発足した米ニクソン政権は、ベトナムからの「名誉ある撤退」を掲げ、対ソ、対中関係の改善に取り組んだ。ニクソン政権も沖縄返還を進める方針を維持したが、それは沖縄返還が日米の負担分担を拡大させる梃子（てこ）となることと、沖縄住民の反米感情の高まりで米国の沖縄統治は限界を迎えていることが理由であった。

沖縄では、６４年から６８年までの間に米軍関係者によって5367件の犯罪が発生し、うち殺人、強盗、婦女暴行などの凶悪事件は504件にのぼった。６８年１１月には B52 が嘉手納基地に墜落した。同月の琉球政府行政主席選挙では、「即時無条件全面返還」を掲げた屋良朝苗が勝利した。

この流れも受け、６９年３月、佐藤は沖縄の「核抜き・本土並み」返還を目指すと国会で答弁し、同年１１月に沖縄返還が決まった。

⑶　米側にとって沖縄返還後の米軍基地のあり方が重要であった。70年安保では、韓国、台湾での有事の際に米軍が米軍基地を自由使用できる余地を残す内容となった。また、佐藤とニクソンは、返還後も緊急時における沖縄への核の再持ち込みについての密約や、財政負担に関する秘密覚書を交わした。

次回の学習会は、５月 13 日(土)10 時 20 分から zoom で行います。参加される方は、裏表紙の藤堂のメールアドレスまで、ご一報をください。前日に≪招待≫を送信します。

# ≪辺野古土砂北九州・今後の予定≫

●4月22日(土)…≪小倉駅前街頭宣伝≫16時～
●4月26日(水)…≪世話人会≫14時～　生涯学習総合センター・情報学習室
●5月27日(土)…≪小倉駅前街頭宣伝≫16時～
●5月31日(水)…≪世話人会≫14時～　生涯学習総合センター・情報学習室
●6月3日(土)～5日(月)…土砂全協第10回定期総会in沖縄
●6月10日(土)…≪連続学習会・安保条約≫　10時20分～11時50分　zoom
●6月24日(土)…≪小倉駅前街頭宣伝≫16時～
●6月28日(水)…≪世話人会≫14時～　生涯学習総合センター・情報学習室

## ≪会費納入のお願い≫

2021 年度(現在は 2022 年度です)までの会費が未納の方は、ゆうちょ銀行振込用紙を同封していますので、入金をお願いします。諸物価高騰の折、大変恐縮ではありますが、ご協力をお願い申し上げます。

問い合わせは大野まで(090-4482-0043)

## 「辺野古土砂ストップ北九州」口座のご案内

年会費は個人 1000 円・団体 3000 円です。
【辺野古土砂北九州の口座は】ゆうちょ銀行　　記号番号　01700-7-166911
【他金融機関から振り込む場合は】 ゆうちょ銀行　当座　一七九店　0166911
加入者名…「辺野古土砂ストップ北九州」

## ≪辺野古土砂ストップ北九州≫

メールアドレス…hts@mtc.biglobe.ne.jp
〒800-0117　福岡県北九州市門司区大字恒見 122-3 藤堂方
藤堂 090-6299-2608・南川 090-2853-7116・八記 080-1730-8895

2023 年 4 月 22 日